



シンガポール日本語補習授業校
The Japanese Supplementary School, Singapore (JSS)

「学校だより」第07号 文責 加藤

令和8年(2026年)7月9日

H P で公開中 www.jss.edu.sg

これは「なんちゃってAI」のお話です！

最近、日本ではそのメリットやデメリットを含め「生成 AI」がニュースなどで話題となっています。

さて、私は「AI」と聞くと次のような授業を行ったことを思い出します。



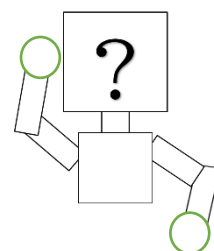
約25年前、私は1年生(約20名)を担当していました。

そのとき、「教師以外の第三者が授業の中で子どもたちをサポートする場合の効果」を調べることを目的に、「パソコンに書き込むと「ロボット」の声として音声を発する」というソフトを使って約一か月間、様々な教科の授業で授業実践をしたことがありました。

そこで、子どもたちもよく知っている「ロボット」が突然教室に来て子どもたちと学習をするというストーリーを設定しました。6月のはじめこの「ロボット」が教室のパソコンから子どもたちに語り掛けました。「1年生のみんなこんにちは、ぼくはロボットの国からきた〇〇〇です。これからぼくも一緒に授業を受けたいです。いいですか?」(※私が事前に打ち込んだ言葉をその場で指定しています。)
「今日のめあては、・・・だね。加藤先生!」(※私との掛け合いもバッチリです。なぜなら私がストーリーを作っているのです。)

そして日々の授業が進んでいきます。時には子どもたちの質問に答え、時には社会のルールやマナーについて気付かせ、また、ある時は子どもたちと意見を交換したりしました。(※もちろん、私が予想される文章を事前に打ち込んでいます。)

子どもたちの様子はというと、興味や関心を持って授業に参加していました。それは態度から分かりました。姿は見え、スクリーンに映った文字とスピーカーから聞こえてくる「ロボット」は、しっかりと意思を持ち(※それはそうです。私が予め書き込んでいます。)、子どもたちの疑問に答えたり、励ましたりしてくれます。この「何かロボットらしいもの」の存在に子どもたちは親しみを感じながら毎日授業に参加していました。



しかし、それから20年以上が経ち、この「なんちゃってAI」が本当の「AI」となって現実に教育界にやってきました。既に子どもたちは様々な形で、学習や生活の中で活用しているのが現実です。

さて、これからは少し余談になりますが、実はこの「ロボット」を登場させてから3週間ぐらい経った時、ある問題に私は気が付きました。それは、「どのように子どもたちとロボットがお別れをするか。」ということでした。そこで私は、1学期も終わりとなる7月のある日、生活科の最後の授業で「ロボット」にお別れの話をすることにしました。「ここでみんなに言わなければならないことがあるんだ。実は今日の授業を最後に僕はロボットの国に帰るんだ。今まで仲良くしてくれてありがとう……。いつもは声しかみんなに届けられないんだけど、今日は最後だから特別に姿を見せるよ。窓の外を見てごらん。」外には私が作成した「ロボット」の顔の段ボールをかぶった同僚が子どもたちに手を振っていました。

すると、教室は大騒ぎとなり「〇〇〇だ！」と叫びながら全員跳びだしました。「まずい！」私は、その子どもたちを追いかけてきました。

後で同僚から聞きましたが、追いかけてくる子どもから身を隠すのが大変だったようです。（※同僚は段ボールを被っていることもあり躓いて転んだそうです。もちろん、校地内の話です。）

今の子ども達なら普通に「先生、それAIでしょ！」とかになるのでしょうか。

当時、私が受け持った子どもたちはもう30歳を過ぎた年齢になっています。1年生の時、教室にロボットの国から「〇〇〇」が来て一緒に学習したことを今ではどう思っているのでしょうか。機会があればいつか聞いてみたいです。

生成AIの利用について

今年の4月、高市総理大臣は、教育現場での生成AIの急速な普及とリスクを踏まえ、関係部門に「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）」の速やかな改訂を指示しました。今後は「生成AI」の性質やメリット・デメリット等について学ばせるとともに、より教育現場に即した運用を目指す方針のようです。

※現在文科省が示している具体的な例（不適切）は以下の通りです。

- 生成AIのメリットやデメリットなどを学習せずに子どもたちに使わせること
- 読書感想文などのコンクールやレポートを提出する際、生成AIがつくったものを自分の成果として提出すること
- 定期考査や小テストなどで子どもたちに使わせること など

この文科省の方針を受け、本校では「生成AI利活用検討委員会」において検討した結果、学校として次のような活用方針を決定しました。

○生成AIの活用

- ・ 中学部を主とし、必要に応じ、次の場面における試験的活用を図る。
 - グループワークで、一定の議論やまとめをした上で、足りない視点を見付け議論を深めるとき
 - より自然な日本語表現へ改善したいとき
 - 人ひとりの興味関心に応じた単語リストや例文リストを作成するとき
- 「本校 HP にも掲載」

本校では、今後も補習校としての立場で、「生成 AI」を活用する上でのメリットとデメリットをしっかりと検証し、「効果的な活用方法」を探っていきたいです。



「JSSのきまり」について

今年度が始まって3ヶ月が過ぎようとしています。子ども達は新しい先生、新しい学級にも慣れてきたころだと思います。

ただ、その「慣れ」に伴い学校生活のきまりが守られていない状況も見受けられます。学校では再度子ども達と「JSSの決まり」の確認をいたします。保護者の方におかれましても今一度お子さんと一緒にご確認ください。

1. 児童生徒は、通学時に身分証明書を携帯する。
2. 学校には、食べ物や学習に必要なものを持ってこない。
3. 校内では緊急連絡以外に携帯電話を使用しない。
4. 学校では上履きに履き替える。
5. 学校内では、危ないことをしたり、ものをこわしたりしない。
6. 使用した机と椅子は、きれいにして元の通りに並べる。

「ルールを守る」というのも日本人としての大切なアイデンティティの一つだと考えます。

※BLEND「リンク集」に掲載

七夕集会

7月4日、日本の伝統行事である「七夕」について学ぶ集会を全校で実施しました。

第一部（小6、中学部）第一部は、“七夕にちなんだ動画「くらしさいじき たなばた」を視聴しました。私からは、「北海道の七夕は8月7日にやること（月遅れ七夕）」「日本では七夕にそうめんを食べる風習があること」などを伝えました。



第一部（小6～中3）

第二部（小3～5）は、PA 役員の方々による紙芝居「たんざくに願いを書いて」を視聴しました。また、私からは「江戸時代、字が上手に書けるようにという願いから、短冊に字を書くようになった。」「北海道では、気候の関係で笹竹は育たないので短冊は柳の葉に飾る。」などの話をしました。



第二部（小3～小5）

第三部（小1・2）は、七夕の由来について学び、七夕の歌をみんなで歌いました。途中、私からはスライドで「七夕に関するクイズ」「漢字の書き順を正しく書くことの意味」の話をし、PA 役員の方々による紙芝居「たんざくに願いを書いて」を視聴し、最後に PA 役員の方々にお礼を言って教室に戻りました。



第三部（小1・小2）

とっても楽しいひとときを過ごすことができました。ご協力いただいた PA 役員の皆様に感謝申し上げます。